



# SPACE

No.30

日本臨床心理身体運動学会会報第 30 号 2013 年 12 月 25 日

編集発行 日本臨床心理身体運動学会 会長 山中康裕

---

## 一般研究発表を体験して

茂 晃久（東京都足立児童相談所）

本学会第 16 回大会におきまして「面接過程において関係を見るということについて一面接者の「甘え」をとおしてクライアントを理解するところみー」と題し、一般研究発表をする機会を頂きました。私自身初めての学会発表でしたので、期待と不安でいっぱいでした。学会発表を決意してからは、抄録や発表原稿などの作成作業に追われる日々で、発表のことが毎日頭から離れませんでした。本研究は修士論文を基にしたものでしたので、ある程度は形になっていたつもりでしたが、いざ研究発表の準備を始めるとまとまりのない修士論文であったことに驚かされました。修士論文は提出することが目的となってしまうところがあり、また自分の経験や能力では手におえないテーマを扱っていることを自覚していたので、論文を指導して頂いた先生にかなり引っ張って頂いていたことを改めて認識させられました。しかし、この研究発表を通して再度修士論文を読み直し、事例を読み直し、文献を読み直したりすることで、周りが見えずにただ前（足元だけかもしれません…）を見て走って書き終えた修士論文をほんの少しばかりではありますが、違う視点でまとめ直すことができたことと発表を終えた今は実感しています。発表の内容としては、私自身のプライベートなことを扱っていたり、自己完結している感じがあったりしているなど、聞いて頂いた先生方の中には違和感を覚えられた方もいらっしゃるかもしれません。今後の臨床や研究に生かすために本学会や研修会でお顔を合わすことがありましたら是非ご意見やご感想を頂けたらと思います。よろしくお願い致します。

発表の体験はと言いますと、発表当日は緊張をしており、歩き方も話し方もぎこちなかったように思います。午前と午後に研究発表が 2 つずつあり、私の発表は午後の 2 つ目、つまり最後でした。自分の発表まで 3 つの研究発表を聞くことができ、他の先生方の発表の仕方や資料の作り方を学ぶ（盗む？）時間になりました。これまではただ受身的に聞いているだけだったので、有意義な時間となりました。またそれと同時に、発表を聞いている時間は自分の発表を待つ時間にもなっており、気持ちを整理する時間になりましたが、逆に整理できない気持ちを抱えていなければならない時間

にもなりました。しかし、自分の発表の時間になると、これまで自分の発表を待っていた時間が無かったかのような感覚になり、発表の壇上に上がり会場を見渡した瞬間から、発表を終えて自分の席に戻るまでの時間だけが切り抜かれたような体験をしていました。発表中は緊張もあり準備した原稿を読み上げており、手元だけを見ていました。そして何よりも緊張したのは、質疑応答の時間です。発表中は原稿を読むことに必死になっていたのですが、発表を終えると原稿に向けていた視線がフロアー、座長、そして指定討論者の先生方へと移り発表の反応を直に感じてしまいます。発表原稿を読み終えた達成感もあり、自分の中ではある程度まとめることができた研究だったので緊張は高いながらも沢山のご指摘を頂き自分の考えをさらに深めていけたらと思っていました。しかし、しばらく沈黙が続き会場がシーンとなっていました。「あれ！？やっちゃった？」と一瞬心の中で思い、色々と考えをめぐらせていました。そんな雰囲気の中、気を遣って下さったのか大会実行委員長の仁里文美先生（金城学院大学）が助け舟を出して下さり、先生の質問に答えることで自分の考える整理することができました。しかし、私と仁里先生とのやり取りのみで他の先生方の参加がなかったことを残念に思っていました。その後、しばらくの間があった後、座長の古谷学先生（常葉大学）が私への質問を交えながら指定討論者の中島登代子先生（常葉大学）にコメントを振って下さいました。中島先生のコメントを振り返ることは紙面の関係上割愛しますが、先生から頂いたコメントで特に印象に残っており、大きな宿題を頂いたと感じられたものを記し締めたいと思います。正確な言葉であるかどうか自信はないのですが私の発表を「サッカーを見ているのに野球の話をしている」と表現されました。これは私にとって非常に示唆深いコメントであり、サッカーや野球の再認識、そしてスポーツとは何かと考えさせられました。今後、自分は何をしているのか、何をすべきなのか、何を目指しているのか、何が必要なのか、答えがあるかわかりませんが様々な刺激を受けて考えてゆきたいと思います。このように今回の発表の体験を通して、得られたものを大切に抱え、これまで以上に精進してゆきたいと再度決意をした次第であります。

最後になりましたが、本大会が成功し、有意義な時間を過ごすことができたのは、大会実行委員長の仁里先生をはじめ、実行委員の先生方、そして学生の皆さんのご尽力があったからこそであります。このような貴重な場を与えて頂き本当にありがとうございました。深く感謝申し上げます。



## 大会参加記

米丸健太（国立スポーツ科学センター）

金城学院大学にて開催された日本臨床心理身体運動学会第16回大会に参加しました。大会1日目の午前は、事例研究発表『家族のために先に進みたい』女性との面接』（発表者：高木先生）を拝聴しました。事例を聞かせていただきながら、いろいろな感情が揺り動かされるとともに、言葉でうまく表現できない何かふわふわした感覚が自分の中に残りました。事例を読めていないことによるものもあると思いますが、「クライアントを中心にぼんやり聴く」ことを体験させていただいたようにも感じました。

午後は、一般研究発表を拝聴しました。一つ目の演題は、「画用紙を変えて実施したバウムテストの『はみだし』と『樹冠』の検討—同一被験者に行った縦長 vs. 横長および A4 vs. B5 の調査から—」（発表者：佐渡先生・松本先生）でした。バウムの一回性や状況因子の解明を研究の課題として言及される中で、バウムの『はみだし』に着目された点に興味を持ちました。私の力量不足で、どうして『はみだし』に着目されたのか十分に理解することはできませんでしたが、臨床家でもある研究者の臨床経験による要因が反映されているのだと考えました。そうだとすれば、やはりバウムテスト（に限らず、心理検査）の特徴は、検査者とクライアントの関係において作られ、読まれるところが大きく、そのことを大切にして研究あるいは臨床を進めていくべきなのだろうと考えさせられました。二つ目の演題は、『面接過程において関係を見るということについて—面接者の「甘え」とおしてクライアントを理解するところみ—』（発表者：茂先生）で、クライアントと面接者の関係に着目された研究でした。先生ご自身のこれまでの体験を包み隠さず発表されたことに、敬服しました。また一方で、ディスカッションを聴きながら、「言語化（意識化）せずに持つておく」ことを指摘されていたことが自分の中にひっかかりました。しかしながら、このことはまだ自分の中で消化しきれていないため、今後も考えていきたいと思えます。

大会2日目の午前は、ワークショップC「臨床ナラティブアプローチ入門」（講師：森岡先生）を受講しました。ナラティブアプローチの意義や特徴などについて、先生ご自身の事例を踏まえてお話いただきました。様々なことを感じ、学ばせていただきましたが、ナラティブアプローチが対象となる個人の体験に関わる（ついていく）ものであり、それがアスリートの体験世界においても有用であると指摘されたこと、自然科学が台頭するスポーツ科学の中にナラティブを位置づけていくことを課題として指摘されたことが印象的でした。それらは、スポーツに関わる一人の専門家として考えていかなければならない大切な課題であると思えます。まずは、目の前のアスリートの世界についていけるように、力をつけていくことから始めたいと考えました。

そして午後は、基調講演ならびにシンポジウムを聴講しました。『再生～異界への邂逅』というテーマによる赤坂先生の講話、仁里先生の事例、山中先生、中島先生、森岡先生のコメント、ならびにディスカッション。自分の中にひっかかった言葉、表現などはいくつもあります。それらを整理して言語化することができないでいます。自分の体験と結び付けていくつか感じられそうな部分もありましたが、正直なところ

多くが理解できず、自分にとっては、まさに異界のようでした。人間（クライアント）の体験世界を共有するためには、まだまだ訓練が足りないと感じさせられました。

全体を通じて、「面白そうだが、わからない感じ」が自分の中に残りました。今大会で体験した「わからない感じ」を少しでもわかるようになるためには、ご自身の体験について「まだ何だったかわからない。考え続けている」と述べられていた赤坂先生の姿勢に習い、この「わからない感じ」を考え続けていくしかなさそうです。自分中の体験を大切に、今後もこの学会で学んでいきたいと思えます。

---

### 編集後記

SPACE 第 30 号をお届けします。会報担当が交代して最初の会報です。今回は 9 月に行われました第 16 回大会について 2 人の方に感想や印象などを書いていただきました。私は二日目だけの参加でしたが、基調講演とシンポジウムを聞くことができました。そこで話された赤坂先生のお話がとても魅力的で印象に残りました。

学会事務局が新元社に移り、それに伴って学会の事務運営が少し変更になっています。会報の発行形態も変更になっていますが、会員のためにあることには変わりありませんので、会員相互の利益になるようなものがあればお知らせ下さい。（鈴木）

<b>SPACE</b>	<b>No. 30</b>
<b>日本臨床心理身体運動学会会</b>	<b>30 号</b>
<b>2013 年 12 月 25 日発行</b>	
<b>日本臨床心理身体運動学会</b>	
<b>会 長 山中康裕</b>	
<b>編集責任 鈴木 壯</b>	
<b>事務局</b>	<b>〒541-0047</b>
<b>大阪府中央区淡路町 4-3-6 新元社内</b>	
<b>TEL : 06-6221-2600</b>	
<b>FAX : 06-6221-2611</b>	
<b>E-mail : office@rinsinsin.jp</b>	